ペン持つ手にスコップ、ハンマーを、そして次にその手に銃を、の時代に入って行く。学校での講義を受ける時間は全くなかった。

飛行場建設の時の事である。某日、帰途のトラックが路肩を踏み外し一番下の畑に転落、荷台にすっぽりと覆いかぶせられる形となった。ぐらっと感じた次の瞬間土煙りの中にいた。まさにパニック状態であった。どうして外に這い出したか全く不明、肩をはさまれトラックの下敷きになり身動きのとれない友がいる。どうやって助け出したのか思い出せない。とにかく救出した。骨折の重傷を負った友は、幸か不幸か兵役は免除された。しかしその友はこの世に今はいない。

軍は次々と学徒の志願制度を打出し発表していった。海軍予備学生、陸軍特別甲種幹部候補生等、「どうせ軍隊に入るなら幹部コースを早めに」、「いや最後まで待つ」、二つの嵐が学生の間に吹き荒れていた。私も陸軍特別甲種幹部候補生を受験したが、陸軍現役徴兵が先に決まり、一九四五年（昭20）一月二日香川県善通寺師団の砲兵隊に入営した。出発は十二月三十一日深夜、出発時隣組、町内会の方々に送って頂き、大阪駅では中学、大学の学友の歓送を受けた。「国の為だ。元気で頑張れよ」「あとは頼んだぞ」。ぐっとくるものを感じたが、涙は見せられない。万歳の声を背に列車に乗り込む。「断つに忍びざる絆を切って我は征く」。当時の心境である。車中の老婆に「ご奉公ご苦労様です」この一言が耳に残っている。駅頭で見送ってくれた友も次々と出征して行った。その中の何人かが戦争のいたましい犠牲者となり散華した。悔み切れない。

陸軍二等兵（一番下の階級）の生活が始まる。砲兵隊には馬がつきもの、馬の世話に始まり、馬の世話に終る。その間三度の食事の準備、あと片づけ、部屋の掃除、古参兵の靴の手入れ、身の廻り一切の世話、演習、兵器の手入れ、一時の休みもない激務が続く。緊張の初日が終ったあと、食事後何か物足りなさを覚える。初年兵誰しもが体験させられる空腹感である。一日四合半の割当では満腹感など及びもつかない。そんな或る日、馬の食糧の一部の高粱（こうりょう）の煮かすを深夜部屋を抜け出して食べた者がおり、夜間巡察士官に見つかり、営倉（軍の刑務所）入りの処罰を受けた。着衣の